

ご入学おめでとうございます。春の息吹と輝きが溢れるこの広島の地に、3ヶ国の留学生を含む685名の皆さんを県立広島大学の学生としてお迎えできましたことは、私達の大きな喜びとするところです。併せて、これまで皆さんを支えてこられましたご家族の方々に、県立広島大学を代表いたしまして心よりお祝いを申し上げます。さらに、ご多忙の中、湯崎広島県知事、林広島県議会議長を始め、ご来賓の皆さまにご臨席いただき、誠に有り難うございます。

それではまず、皆さんが門をくぐられました県立広島大学についての紹介から、お話を始めたいと思います。私達の大学は、県民や多くの方々の期待を担い、広島市内にあった県立広島女子大学、庄原市の広島県立大学、そして三原市の広島県立保健福祉大学を再編・統合し、2005年、県立広島大学として開学しました。以来、広島市、庄原市そして三原市にある3キャンパスを、広島県全域の1キャンパスとして捉え、教育・文化、そして産業を育む、いわゆる「知の創造拠点」としての役割を担うべく努力を続けてまいりました。さらにその3キャンパスに加え、広島市の中心部に広島県からの無償貸与を受けたサテライトキャンパスが、4日後に誕生します。本学はより一層、総力を挙げて教育情報の発信を、県民、社会人に展開するつもりです。このように、本学は今、さらなる飛躍に向けた9年目の春を、皆さんとともに迎えようとしています。

結束することの大切さを説いた有名な毛利元就の、三子教訓状ではありませんが、それぞれ、3つのキャンパスで培われてきた各大学の資産は、束ねられた一つの大学として、その強みを発揮しつつあることは疑う余地はありません。

大学を支える基盤となる力は、教育力と研究力です。開学後8年を経た現在、統合による確かな成果を見ることができます。例えば本学の全授業に対する学生の満足度調査結果は、統合初年度は80%でしたが、毎年上昇を示し、組織を挙げての授業改善の努力により昨年度は94%にまで達しています。学生が授業に満足を感じることは、大学の教育成果を上げるための何よりも重要な前提条件となります。

一方、研究力についてはどうでしょうか。大学の研究力指標の一つとされている文部科学省からの科学研究費助成金の採択件数は、昨年度は統合前の約2倍、88件の採択件数に達し、この5年間、中・四国・九州25公立大学のトップの座に位置しています。

こうした教育力と研究力は、相乗効果を発揮して本学の誇るべき資産となり、現在の教育と研究活動を支えています。さらに本学の学生の、勉学に対する取り組む姿勢にも、目を見はるものがあります。例えば、数値で示せるものとして国家試験の合格率を取り上げます。昨年のデータで言えば、管理栄養士、看護師、助産師、作業療法士の各国家試験については全員合格、100%の実績を残しています。また社会福祉士は76%でしたが、受験者数50名以上の大学にしばると全国1位、大阪府立大学や同志社大学を10%以上もしのいで

います。また理学療法士について言えば合格率は 97%、この値は医学部を持つ広島大学をしのいでいます。

しかしここで強調したいことは、私達の大学は、単に合格率を誇るレベルの大学ではないということです。合格できる力の養成に加え、今後社会に巣立つ学生が、自分の力を発揮できる、いわゆる実践力を育てることが大学の教育として、本質的に重要であると捉えています。

それでは実践力をつける教育とは何でしょうか、最近、皆さんは、グローバル社会という言葉をししばしば聞く機会があるかと思えます。Globe は地球ですから、グローバル社会とは、国家や地域という境界を越えて個人や企業の活動が影響しあう社会を意味しています。利害や価値観が国を超えて相克しあうことは、環境破壊、飢餓、貧困、所得格差など様々な問題が地球規模で露呈することになります。これらの問題は、人類が自らの生存のために解決する糸口を見いださなくてははいけません。解決するのは皆さんの世代です。私達の大学は、今年度からスタートした第二次中期目標に「グローバル社会の進展を見据えた実践力のある人材育成」を教育目標のトップスローガンに掲げて全学を挙げて取り組むことを約束しました。

それでは、グローバル社会における実践力のある人材育成とは具体的にどのような教育を目指すのでしょうか。まず、様々な外国の文化への理解とともに、外国語によるコミュニケーション力を十分に身につける教育をすることが挙げられます。そしてもう一つ、それは、グローバル社会で浮かび上がった様々な課題に対する「問題発見能力と解決能力」を育てるということです。これはまた、最近よく言われるイノベーション、つまり新しい発想、革新的な方法を創造する力の原点にもなり、皆さんが、今後社会から求められる非常に大切な能力と考えられます。実はこの「問題発見能力と課題解決能力」は高校までの通常の教育とは一線を画すもので、何よりも皆さんの日常的なものの見方、考え方が大きく関与します。

それではどのようにしてこの能力を開花させ、磨くのでしょうか。それは何故だろうかという疑問を絶えず心に発し、問題に対する発見力を磨くことです。実はこの問いかけこそが、文明の進歩の動力であり、人間特有のものであります。例を挙げてみます。夏の日、庭の前に見慣れない淡いピンクの朝顔に似た花が咲いていました。何という花だろう。調べると浜昼顔でした。これは海岸に咲く植物ということです。海から離れたこの地に何故生えているのだろうか。調べるとどうやら家の前は、昔は谷になっていて遠く離れた海岸から砂土を持ってきて埋めたということが分かりました。問いかけはさらに広がります。朝顔があつて昼顔があるなら夕顔という植物があるのでしょうか。調べるとあるのです。昼顔や朝顔とよく似た同じヒルガオ科の植物です。そしてこの夕顔の実は巻き寿司に使われる干瓢ということが分かりました。実を紐状にむいて干したものが干瓢です。源氏物語 54 帖

の 4 帖目は夕顔の君の章になっています。確かに源氏物語絵巻図には、夕顔の君と粗末な庵が、そして、その家の垣根には、さびしそうな白い夕顔の花が描かれています。干瓢を食べるために植えられていたのでしょうか。光源氏が恋をし、やがて急死したあの不幸な夕顔の君が余計哀れに思えます。これは私の経験でしたが、家の前に咲いていた昼顔から源氏物語の世界まで、疑問は疑問を呼び、様々な知る喜びを味わうことができました。

些細なことにも注意を払い、観察によって問題点を見だし、様々な手法でその答えを解き明かし、分かった喜びを味わう贅沢な体験、これが大学教育に求められる「問題発見能力と問題解決能力」の開発を育てます。

大学の講義の中で学術的に総合的にこの訓練をする場が、卒論研究です。私達の大学では、理系文系問わず、全学部とも必修として全学生に卒論研究を課しています。皆さんは、1年あるいは学部によっては2年間、自分の興味ある分野の中で課題を設定し、それを文系では書物や調査、理系では主に実験によって解き明かし、課題解決に至るわけです。自ら解き明かす作業は決して楽なものではありません。TVゲームのような攻略本はありません。答えは自ら探り導くのです。大学で学んだ、全ての知識と関連分野の論文を参考にしながら、多くの試行錯誤を繰り返します。そうした努力が問題を解き明かし、答えを見いだす力を育てます。卒業論文、大学院では修士論文、あるいは博士論文を完成した時には、きっとそこに、新たな自分を感じ取ることができるはずです。教員は自らの教育力と研究力をフルに発揮して卒論研究への熱心な指導に努めています。やり遂げた学生の喜びと、自信に満ちた顔を見たいからです。やり遂げたその自信は、グローバル社会に活躍する皆さんの、何よりも大きな力になるはずです。

実りある卒論研究をするためには、普段から積極的に、授業内容や様々な出来事に疑問を持ち、問題を自ら解き明かす習慣をつけることが大切です。過去は変えられませんが、未来のあなた自身は、これから自分が作るのです。全ては今からです。高校までの自分では、皆さんは社会に対してまだ何も回答を出していないことを自覚してください。

最後に 3 年前に亡くなった事業家であり、多くの啓発を私達に与えてくれたジム・ローンの言葉で式辞を締めくくります。

「収穫は種を植えた人だけに訪れる。祈った人ではない」

私達、県立広島大学教職員一同は、心から皆さんの積極的な学びと学生生活を、絶えず応援します。頑張りましょう。

平成 25 年 4 月 5 日

県立広島大学 学長 中村健一